

打すてし歌集も篋にさくらるゝ古き都の夕月夜  
かな

ときは木の花の梢さうちげぶる嵐の山の春の夕  
くれ

石川ふさる

母と二人加茂のほごりに家居してさうしなごよ  
む一とせもかな

つとよりてわれを見あけしさを鹿のそのまなさ  
しの忘れぬかな

芳賀はる

嵐山櫻さく日の春雨にぬれつゝも立つ旅の人か  
な

初夏の照る日をあひて新桑の若葉つむなり村の  
少女ら

橋本せん

朝の風涼しく吹きて夏山の若葉の上を雲の飛ふ  
見ゆ

大竹千葉

ゆふつゝのまたゝく空もあはゝし悲しいかな

吹きいつる風のみとりにさらゝとわか草のう  
こく夏のゆふくれ  
樹々のみなわか葉となりしけふの日はあまりう  
れしくあまりかなしき

内田えく

つくゝと身の甲斐なさに眺め入る窓の若葉に  
風わたるなり  
わかみどりしたゝる色にはふらむ雪折聞きし  
里の林も

野中しん

春たけぬ蝶の羽ねさへねむけなりまして旅寝の  
夢のまどけさ

山川はつ

あけの塔森をへたつる紫のかすみの上に見るか  
よろしさ  
五十鈴川浅瀬の石も苔むしてむかひなからの水  
の清けさ

若緑歌おもひつゝ立ちよれば袖にこぼるゝ露も  
おもしろ  
露多きわか葉のかけにふみよめはセルの單衣の

よきちこのふりわけ髪と春雨にぬれて艶もつ京  
の青柳

日の神のわれはめつ子とほこりに日にけにし  
ける若楓かな

櫻部鳥羽

いろゝの火の影うかふ大かはをものゝ音のせ  
て涼舟ゆく

野邊の草ふみて流るゝ雲を見てふるさと思ふ春  
の夕くれ

青丹よし奈良のみやこは花もよし春日野もよし  
みほとけもよし

笛あらはとりてもみまし龜山の峰の松風吹き出  
てにけり

鶯一つ大空に舞ふ朝はれのさつきの森の濃きみ  
どりかな

堤はな

舟旅の朝空をかしむかひより山の色々あらはれ  
て来ぬ

袖ぬれにけり

山下さい

ゆるらかに春の川ゆくふねの上の三つの蛇の目  
に日照雨するかな

さみたれの晴れたる朝の湖に白帆見る目の心地  
よさかな

舟子らの積荷をあくるこゑの中にいとおたやか  
にくれね港は

いにしへのふみにもものらぬ物かたり聞かはや寺  
の壁におよりて

初夏の日をうけて立つ若楓いとすかやかにつつ  
ましやかに

眞山ふぢの

櫻散る夢殿あたりさまよへは身は玉ゆらの古き  
あて人

若楓をよめく窓に鏡おきてけはひなごする朝の  
すゝしさ

ゆふはえのわか葉をみれば倦みはてし心もとみ  
によみかへるかな

増賀はつ

七十一

七十一

三千の僧たち中につゝみたる比叡の高嶺の朝霞  
かな  
朝日さす庭の若葉の清けさにふかきいきなとす  
るあしたかな

福田 ふめ

わかかへるあしたの海の氣をすひて立ては王者  
の心地するかな(二見浦にて)

天羽生いと

里の子か若葉を巻きて吹く笛の音かすかなり初  
夏の森

淺田 ふさの

あけほのゝみやこの大路大原女の花めせとよふ  
聲もなつかし

澤口 やす

清水の塔に夕日の照り映えてあはくもかゝる花  
の雲かな

源 みい

若楓かけをしつむる池水に金魚よろしき初夏の  
ころ

家さかり遠く來つると舟子らのうたふを聞くも  
涙なかるゝ

む古寺の僧  
うす青き瓦斯を蔽ひてしけりあふ門の楓に夜の  
風吹く

水野 のり

小夜ふけて磯うつ波の音高し沖の小舟の人をこ  
そおもへ

宮地 そで

ねむりより天地はさめて朝の日は色くれなるに  
森はみどりに

廣間 ひで

つく／＼とつら杖つきて春雨の京の一日を東山  
見る

杉山 はな

春日野の小鹿のひとみなこやかにはるひのとげ  
き奈良の古里

菅野 けい

渡舟のり合せけりきのふかも町の辻にていてあ  
ひし君

菅野 けい

水の色白うかゝやく利根川をつらなり下る真帆  
よ片帆よ

菅野 けい

幸多き夢をは得むと寶舟折りしきて寝ぬ年のほ  
しめに

朝な夕な港をいてゝまたかへる舟のゆきゝのや  
すけなるかな

のどかにもさせる春の日うけてゆく傘とりとり  
の春の旅かな

春の雨柳の上に大寺と櫻とかすむ京の山かな  
會堂の白きか一つそゝり立つ夏に入りたる葉櫻  
の村

ふる里はさつきとなれり家一つ立てる丘の上若  
葉そよきて

水民 よし

魚ひさくひるのとよめき今絶えて月影あはし苦  
舟の上に

沙みつや港入りする大船の白帆ににほふ夕日か  
けかな

あらひ髪風にふかせて小簾こしに庭の若葉のそ  
よぎをそみる

芦間よりけふり立つなり川舟にうきすまゐする  
人のゆふけか

まれに訪ふ人のかへりて残る日はさひしかるら

三つの才をなふる君はいつかたの舟にか乗ると  
のたまふ大臣

平野 さと

日の光水にしめる春の宵舟に花見る人のゆか  
しさ

さ青なるみ空の色をほのみせてかろけにゆるる  
若楓かな

菅野 けい

旅やかた日記かく友のおもやせの見ゆるもかな  
し春のともし火

末遠き一すちみちを京ことはまねびつゝゆく妙  
心寺かな

桑つみて歸る暇の山毛櫸の樹のわか葉をてらす  
宵月夜かな

杉山 はな

明けはまた出船ありとてはなやかに夕くれさわ  
く港町かな

旅人をみなかきのせてする／＼とかららかにゆ  
く渡舟かな

尼寺の春の深きにみ戸をおす比丘尼のおもの白

かりしかな

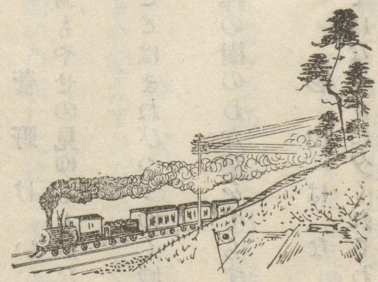
文科二年 富澤美穂子

土橋ゆく君が蛇の目のつくくと眺めやらるる  
さみたれの日よ  
さみたれに道ゆきわぶる幼な人まなびやにゆく  
妹おもほゆ  
君は今お納戸色の矢舁の袂いたきて山見ますら  
む  
川一つへだて、見ゆる若葉山うすく黒みて夕ど  
なりぬ  
月見草ものかけに咲くさみしさの我に似たるを  
思ふ宵かな

關 みさを

物いはず生れたる子の面に似てまた山吹のさく  
日となりぬ  
吾妻山すこし青みて白やかに薄月さしぬ上野の  
旅  
安けさと淡き疲れの眼をあげて今日もまた見る  
夕暮の山  
うす色の衣うちかつき安らげく眠に入りぬ夕暮

の山  
押繪して今日も暮しぬ母と二人静やかにすむ五  
月雨のいへ



彙報

東京女子高等師範學校 學術談話會規程

學術談話會に就いては、本誌第貳號に記し置き  
候が、愈去四月二十日付を以て、中川校長より學  
術談話會成立の儀を承認相成り候。由て、該規  
程の全文を左に掲載し、猶次に該規程によりて  
相定め會長中川先生の承認を経たる（明治四十  
五年四月二十日附）同會文科部内規を記して、  
御報道申上候。

◎東京女子高等師範學校學術談話會規程  
第一條 本會ハ本校生徒ガ平素學修スル事項ヲ  
互ニ談話シ知徳ノ増進ニ資スルヲ以テ目的ト  
ス  
第二條 本會ヲ文科、理科、技藝科ノ三部ニ分  
ツ  
第三條 本會ハ本校生徒ヲ以テ組織ス生徒ハ其

學修スル分科ニ從ヒテ第二條ノ三部ノ一ニ屬  
スルモノトス

第四條 本校卒業生ハ本會ノ贊助員タルコトヲ  
得  
第五條 本會ハ本校教官ヲ請ウテ客員トナス  
第六條 本會ニ會長ヲ置ク。會長ニハ校長ヲ推  
戴ス  
第七條 本會ノ各部ニ部長一名ヲ置ク。部長ハ  
客員中ニ就キテ會長之ヲ囑託ス  
第八條 本會各部ニ幹事ヲ置ク。幹事ハ各部所  
屬ノ會員ヨリ各級若干名ヲ互選ス  
第九條 部長ハ談話ノ事項方法等ヲ監督指導ス  
ルモノトス  
第十條 幹事ハ部長ノ指揮ヲ受ケテ各部ノ事務  
ヲ取扱フモノトス  
第十一條 部長及幹事ノ任期ハ各一箇年トス